63　イェスペルセン否定循環

Jespersen（1917）が様々な言語で存在を認めた否定辞の歴史的変遷は循環しているように見えるので，**イェスペルセン循環（Jespersen[’s] cycle）**と呼ばれる。この循環をvan Kemenade（2000: 56）は次のように説明している。

第1段階：否定は，1個の否定辞によって表わされる

第2段階：その否定辞が，否定副詞か否定名詞句と組み合わさって表わされる

第3段階：第2段階の2番目の要素が独立して否定を表わすようになり，元の否定辞は選択的となる

第4段階：元の否定辞が，消滅する（以上，筆者訳）

中尾・児馬（1990: 159）は，英語史におけるこの循環を（1）のように示す。

（1）	a. Iċ ne secge	OE（c.700-1100）	第1段階
	b. I ne seye not	EME – 15c	第2・第3段階
	c. I say not	14c末 – EModE	第4段階
	d. I not say	15c – EModE	
	e. I do not say	16c – 17c末に確立	
	f. I don’t say	17c –	

この循環は，フランス語では（2）に相当する（Larrivée 2011: 1-2）。

（2）	a. Jeo	ne	dis.		初期フランス語	第1段階
	I-Sg	Neg	say-Pres.1Sg			
	b. Je	ne	dis	pas.	中期フランス語	第2段階
	I-Sg	Neg	say-Pres.1Sg	Neg		
	c. Je	（ne）	dis	pas.	現代フランス語	第3・4段階
	I-Sg	Neg	say-Pres.1Sg	Neg		

本来は強意の副詞であったpas ‘at all/not’ が単独で否定を表わすようになり，口語ではneが落ちるようになったのである。

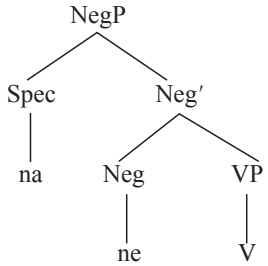
英語の否定辞notは，統語的に**主要部（head）**として分析するのが通説であり，NegPを最大投射とする。文否定のnotは後続するVP（ないし*v*P，もしくは何らかの機能範疇）と併合して**否定句NegP（negative phrase）**となるのである。NegPを用いてイェスペルセン循環を説明すると（van Kemenade 2000: 64-71），歴史的にnotは古英語時代のnaを起源とし，neが単独で用いられていたところに（第1段階），その補助として用いられた（第2段階）。

（3）a. Ne het　　he us na　leornian heofonas to wycrenne
Not ordered he us not learn　　heavens　to make
‘He did not order us to learn to make the heavens.’
（Ælfric, *Lives of Saints* XVI. 127）

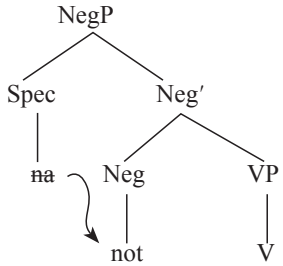
b. Ne　sæde na　ure Drihten þæt …
Not said　not our Lord　　that …
‘Our Lord did not say that …’　　（Ælfric, *Lives of Saints* XXXI. 762）

NegPの主要部だったのは（4a）のようにneであり，当初naは指定部だった。

（4）a.



b.



古英語時代にはあらゆる動詞が上昇していたので，VはNegに移動してneが前接したne＋Vという複合体となる。それがさらに上の機能範疇に移動すれば，（3）のようにne＋V（…）naという語順が生じる。NegPの位置（指定部はna）は固定的であるが，代名詞主語はそれより上の機能範疇に，名詞句主語はそれより下の機能範疇に位置するので，（3a）と（3b）で語順が異なる。naは中英語時代にnat, naht, nawht, noht等，様々に綴られた一方で，neは次第に弱化して選択的になっていった（第3段階）。中英語末期には，neはついに廃用となった（第4段階）。すると，綴りが固定したnot（元na）は主要部の特質を帯び，消失したneの代わりに，（4b）が示すようにNegPの指定部ではなく主要部の位置を占めるようになったということである。これをもって英語史におけるイェスペルセン循環は，初期近代英語時代（1500-1700）に完結した（Cf. Ishikawa（1995）; NegPを用いない説明はMurakami（2007, 2014））。

なお，この現象はJespersen（1917）自身が‘cycle’と名付けたのではない。実際，一度完結した後は同一言語内で繰り返していないという点で「循環」とは言えないのかもしれない。統語的‘cycle’ではなく，語彙が否定極性を経て否定辞へと向かう意味的な‘pathway’だと主張する向きもある（Larrivée 2011）。しかし，それが複数の言語において生じたならば，‘re-cycle’していることは確かである。

（村上　まどか）